



乾 杯 群

• 一九二六 • 拾貳月版

中野勇雄 壹篇
小林直人 四篇

• 第七輯



又は a

中 野 勇 雄

郊外に散歩に出たらタンポポの茎から煙草がにほつてきた。

仰げば佛蘭西フィルムの上に太陽がからんからんしてゐるのだ。私はどつかと腰を下した。そしてポケットからニッケル製の眼鏡をとり出してかけた。眼鏡は、たんに紫色の空気を吸ひ込むのである。それで私の顔はすみれになつて了つた。

私はタンポポの茎を一本折つて口にくわへてみた。それを一口吸ふと私の腹の中に一人の女が飛びこんだ——確定的ではないが、聲から想像すると多分女である。

私はむしうにうれしくなつて、も一口吸つた。また女が飛込んだ。續けて吸つた吸つた……

こうして私の腹の中はたくさんの方に満されて了つた。そして私の足は大根のやうに太つて了つた。

その時、ばたばたと大きな黄蝶が飛んで來た。それをつかまへやうと思つて私は立ち上つた。すると私の足は二本共股からぼきんと折れて了つた。はすみを喰つて私の上半身は傍の流れに落つこつた。

私は匍ひ上らうとあせつて手をもがくと、身体はボートのやうに浮いて走り出すのである。それでいゝ氣持になつて寝て了つた。

——その後は朧げな記憶なのだ。

今までの空はすっかり變つて深い海の色になり、三角形や菱形の星が大小まちつてたくさん飛んでゐた。そして野の果てからは數萬の女の鳴聲が聞えてくるのであつた。

私自身は泥泥へ落つこつた褐色の大きな蛾であつた……

田 甫

——綾瀬村の高橋久由へ——

小 林 直 人

冬とは思へない朗かな朝だね

青物畑の霜柱を踏むと

荒川放水路の堤にあがつた太陽がまぶしくつて

故郷へ歸つたやうな気がする

——千住はすっかり田舎だね

ゆうべはほんとによくねむれたよ

さあ私はこの菜ツ葉畑の畔に腰を下して

春さきのやうなおつとりした空へ

朝のうすにがい煙草をバツバツと吹きあげて

向ふの田甫の中から

もう一度電車が走つてくるのを見てゐやう

江東の生活

(1)

煤煙の中空に架かった

黄色い銅色の虹である

煙突の林立と豚の擾乱と黒空と低屋根と鮮人と……

ごちやごちやになつてひしめき合ひ

ドロドロと無感覚によれられた

濛霧の中の菜ツ葉服である

洗ひ晒した紺緋の女の顔は

ペンペン草の中で眠れて

焼けた赤煉瓦の塀傍に生棲して

鈍い眼を曇空にむきさらして

一心に泣いてゐる虫である

(2)

河岸の泥船から

暗い水面へ子供が小用をたしてゐる

岸からかけた細い橋板を

中年女がしよんぼり渡つてゆく

君よ

今宵はあの泥船へ泊つて

雑に寝しながら船頭の話をかきかうか

かけた月が

ヒヨロヒヨロととうめいな音をたてゝゐる

錆びたやうな色で

河の上の鉄橋を渡らうとしてゐる

君よ！ きこえるだらう

どつかで静かに漕を漕いでるものがあるね

(3)

私の手に滲んだ油は

私の思ひ出を寂しくする

君よ

お互の荒れすさんだ手を眺めることをよして

街へ出かけやう

明るい電車に乗つて街へ出かけて行つて大きな果實店を捜して

戀人の顔を見るやうな思ひのする

戀人の唇を噛むやうな味のする

おいしい密柑を買つてきやう

さあ 鐘がなつたね

夕焼の色の消えないうちに 君よ

街へ出かけやう

なつかしい人間の

なつかしい顔のやうな夕焼の空を仰ぎながら

おいしい密柑を買ひに街へ出かけやう

大正十五年十二月二十日發行

東京府下亀戸町二の六九東京電力社内
福島縣平町二の三〇

小 林 直 人
中 野 勇 雄

編輯者

小 林 直 人

發行所 福島縣平町二の三〇中野方

乾 杯 群 社

印刷所 東京市淺草區馬道町五の八

香 文 社

寄 贈 誌 多 謝！

果樹園 鷺の巣 詩解休 バレイシヨ 新生 葉

骸骨 銅羅 眞砂 路傍詩 亞 香車

な思ひ出す程生きてゐる
知つてゐながら忘れてゐる
忘れて忘れて生きてゐる

● No. 16 BOSEN 均一信を越すよ

あのね
それで私も安心でせう
ね
ね

● No. 0 秋へ送る符號

A ~~~~~ ● ● ● ——— ● ~~~~~
~~~~~ aRRRoP!! ~~~~~

● 初信記 小 林 直 人

南葛飾の音響と匂ひとになじんでから  
半年になる  
油服を着て銀座を歩いてゐると親しい  
友達に迎ひたくなる

● 工場町の空が雲にでもなりそうに重

たく煙つてゐる  
私の冬を迎へる感情は  
バリバリと硝子のやうに明るい

● 忘れかけた姿見 中 野 勇 雄

● No. 1 方面への音信

書いてゐて書いてゐる自分が馬鹿らしく  
なつてくる  
書いてゐるそれでもがまんして書いて  
ゐる書いてゐる  
書いてゐながら馬鹿らしくなつてくる  
まだ書いてゐる

その自分が馬鹿らしくなつてくる

それでも書いてゐる

書いてゐる書いてゐる馬鹿しくなつ  
て書いてゐるんだそれでも書いてゐるんだ

● No. 3 方面への音信

——これは特に風信

生きてゐる生きてゐる

私も君達も生きてゐる知らないで生き  
てゐる

生きてゐながら知らないでゐる

信することも知らないでゐる

生きてゐることを知りながら知らない  
でゐる

私も君達も忘れてゐる忘れてゐること